新たな交流の模索

2014年アベリスツイス訪問団引率者 小谷 貴儀(与謝野町企画財政課 企画政策係長)

1. はじめに

第2次世界大戦中に日本軍の捕虜となって大江山ニッケル鉱山で働かされていたフランク・エバンス (Frank Evans) 氏との縁により昭和59年(1984年)から始まった英国・ウェールズ、アベリス ツイスと与謝野町(当時、加悦町)との交流が、今年で30年目を迎えました。平成4年(1992年)からはお互いの高校生の相互派遣を始め、これまで与謝野町に11回、57名の高校生を受け入れ、与謝野町から10回、58名の高校生をアベリスツイスへ派遣しています。

私は、平成16年(2004年)に随行職員としてアベリスツイスを訪問して以来10年間、本事業の担当者として携わらせていただき、平成20年(2008年)には2回目の訪問も経験させていただきました。また、この間の与謝野町での受け入れ事業につきましても与謝野アベリスツイス友好協会(会長:糸井定次氏)事務局として携わらせていただきましたので、毎年の恒例行事のように自身の予定として定着しています。

さて、平成26年度は、与謝野町から高校生をアベリスツイスへ11回目の派遣をする順番ということで準備を始めた訳ですが、振り返ってみると今回ほど大変な年はありませんでした。事前に分かっていた事項もあったのですが、例年と違うことがこんなに出てくることを予想していませんでした。それは、①面接による研修生の選考、②ホームステイができない、③夏に派遣、④ヨーロッパ経由、⑤山添藤真町長が同行、⑥ソーラン節、が挙げられます。

2. 例年と違うこと

①面接による研修生の選考

この交流事業を永く続けるための方法として、「お互いに無理のない範囲で取り組むこと」との認識から、派遣する高校生の人数を6名程度としており、与謝野町においては毎回6名派遣と決めています。この6名には、町の代表としてアベリスツイスの人達と交流を深め、その経験を広く町内外へ伝える役目が課されることになり、研修生という位置付けで町からは交通費の3分の2以内の額が補助金として交付されます。

前回までは「与謝野町ふるさと人づくり研修事業」として第三者委員会で小論文が審査され、結果、 毎回「応募者全員の抽選による」という選考方法が決定されてきました。平成26年度から同研修事 業の全面改正により第三者委員会がなくなったことから、あらためて選考方法を庁内で議論した結果、 「いくら小論文を一生懸命書いても結局くじを引いて決められるのか」という不満も聞いていたこともあって、面接員が小論文と集団面接により採点する方法で研修生6名を決定しました。なお、選考方法を変更したことによる評価は、別の機会に委ねることとします。

②ホームステイができない

今回の最大の変化は、現地にてホームステイができなくなったことです。

これは昨年度から分かっていたことですが、アベリスツイスの属するケレディギオン(Ceredigion)州議会が学生のホームステイを禁止する方針を平成25年(2013年)時点で決定されていたからです。この決定により、昨年度の与謝野町での受け入れにおいてもこの方針が遵守され、アベリスツイスの高校生達には野田川ユースセンター(最後の3泊は加悦山の家)に宿泊いただきました。



【期間中宿泊した大学寮】

今年度の与謝野町からの高校生についても当然ケレディギオン(Ceredigion)州の方針を遵守する必要があり、出来る限り安価な宿泊施設をという当方の要求に応えていただいた結果、大学寮を手配いただき、滞在期間中そこで宿泊することになりました。

したがって、高校生達は毎日午後10時までに大学寮へ帰って来ることとし、ホストファミリーにも時間までに高校生を大

学寮へ送り届けていただくことになりました。ホームステイであれば与謝野町の高校生がホストファミリーのお宅で家族同様に生活し、ウェールズの生活スタイルや文化等を理解する体験ができましたが、帰寮してから翌日の朝食後まで日本同志による日本語の会話で過ごすことになり、高校生達にとって修学旅行的な滞在になることが残念ですが仕方のないことです。

ホームステイをすることが交流の大きな意義の一つとして考えられてきましたが、ホームステイができなくなったことでこの交流の今後の方向性を考える最初の機会となりました。

③夏に派遣

前述のとおりホームステイができなくなったことで出来る限り安価な宿泊施設を手配する必要が出てきた訳ですが、「大学寮が最も適当な施設であるが大学生がいない夏しか利用することができないので、この時期にアベリスツイスを訪問してはどうか」、という先方の提案を採用することとし、これまで秋に派遣をしていたものを初めて夏に派遣することになりました。



【真夏のアベリスツイス市街地を望む】

アベリスツイスは北海道より緯度が大きい場所に位置しているため、夏でも与謝野町のように蒸し暑くなく、日中でも15~20℃、湿度も低く過ごしやすい町です。朝晩は上着がなければ寒いと感じるくらいで、トレーナーやナイロン系の上着を持参する必要がありますが、渡航前はこんなに涼しいとは思ってもおらず、高校生達への説明が不十分な結果となってしまいました。



【真夏の真っ青な空、美しい花】

また、緯度が高いことでこの時期の日没は1年で一番遅い午後10時30分頃であるため、午後9時30分でもまだまだ明るい夕方。日の出が午前6時前のため一日がとても長く感じますが、日没後は早く寝なければ、当然すぐに朝を迎えます。

前述のとおり高校生達は午後10時までに帰寮するルールとしていましたが、外が明るいため随行者と

しては大きな不安はないものの少し不思議な感覚でした。滞在期間中のほとんどを午後10時まで目一杯ホストファミリーと交流して帰寮していた高校生達も、さすがに疲れた、たまには少し早く帰って来たかった、という声が帰国後に聞かれました。何はともあれ高校生達は充実した毎日を過ごし、また我々随行した大人達もほぼ毎日、午後9時、10時まで先方の協会関係者の自宅などで夕食をいただき交流を深めることができました。



【午後9時30分でもまだ明るい】

43ーロッパ経由

関西国際空港からロンドン・ヒースロー空港への直行便(現在、直行便は存在しない。)利用をやめ、アベリスツイスから一番近いバーミンガム空港からの入国に変更したのは、平成20年(2008年)の派遣からです。以来、エミュレーツ航空でドバイ経由の旅程を採用してきましたが、与謝野町を出発してからアベリスツイスに到着するまで33時間程度かかることから、ヨーロッパ経由の航空便利用を検討することにしました。結果、行きはエールフランス航空でパリ経由、帰りはオランダ航空でアムステルダム経由による旅程としました。

この旅程により7月5日の早朝に与謝野町を出発し、その日の23時30分(現地時間)にアベリスツイスに到着することができました。

このあと述べますが、今回は山添町長が同行し新たな交流の形を探すことが目的の一つに加えられました。7月10日に日本で別の公務が入っているため、アベリスツイスでの滞在時間を出来る限り長く確保し、その滞在中に山添町長でなければならないイベントを目一杯詰め込み成果を持ち帰る必要があります。



【午後11時30分大学寮に到着】

与謝野町を出発してから26時間に短縮されたものの、翌日から交流が始まるため時差ボケの影響で体力的にはしんどいところもあります。しかし、限られた時間を有効活用することができるため、山添町長の滞在日数も最大限確保することができ、また若い高校生達には大きな影響はなくスムーズに交流をスタートすることができました。

⑤山添藤真町長が同行

先にも述べましたが、今回は山添町長自らアベリスツイスへ渡航し、これまでの高校生の交流に加え新たな交流の形を探すことが目的の一つでした。先方の友好協会会長のアウエル・ジョージ氏のご尽力により、英国国会議員マーク・ウィリアムス氏、ケレディギオン州議会議長エレン・グワン氏、同州議会議員レイ・カント氏やアベリスツイス町長ブレンダ・ヘインズ氏と面会することができ、与謝野町の紹介、交流に対する理解や更なる発展について懇談することができました。

また、本町がシルクの産地、織物のまちであることから産業関連の繋がりを模索するため、ウェールズの産業の一つである国立ウール博物館を訪問し、羊毛産業の現状をお聞きするとともに実際に織機でウール生地を製造する現場を視察することができました。

さらに、アベリスツイス大学との交流を目指し、副学長のジョン・グラッタン氏、国際大学戦略担当教授のガリー・ランスリー氏と会談。本町の若い世代の住民がもっと世界を知ることができるようにしたい旨の希望を伝えたところ、大学と連携して奨学金制度を創設できないか、交換留学制度ができないかといった大学側からの提案があり、今後、本町と詳細を検討して行くことを約束しました。



【アベリスツイス大学副学長らと会談を終えて】

さらに、アベリスツイス大学との交流については、今回、生物・環境研究施設を見学させていただくことができ、山添町長帰国後は高校生達に大学構内の案内や学部紹介、特に国際政治学部について詳細に説明いただくなど、これまでにない深いつながりを得ることができ大きな成果となりました。

山添町長は、現地での歓迎レセプションの席で、高校生達の相互交流の継続に加え、企業や大学との交流により新たな取り組みの可能性について英語でスピーチされましたので、ここでその内容を掲載しておきます。

(山添町長のスピーチ)

Thank you for inviting us and we're glad being welcomed by such many people. I'm Toma Yam azoe, the second mayor of Yosano Town from last A pril, and I came here to tell our will to continue this friendship.



【歓迎レセプションにて】

Thank you so much for kindly accepting me

and Yosano High School students into your town this year, too. This is the eleve nth student exchange, and we are so happy to be continuing this long-running ex change relationship with everyone in Aberystwyth. I really appreciate Mr. Arwel George, head of the friendship society, and everyone involved in the exchange program, and all the host families.

Yesterday, we went to Frank Evans grave to place flowers and offered sil ent players. Students, who will bear future, swore not to begin wars. We have to understand Mr. Frank Evans' message of peace, to ensure the actions of the past can never be repeated. 'Consider our blossoms which are beautiful in life and death. Never again let us and human beings die in an ugly holocaust but instead allow us all to live and die naturally and beautifully in peace for ever more. E IEN NO HEIWA'. I'm sure these students will act following this.

I'm thinking the way to develop our exchange between Yosano and Abery stwyth. Yosano is a town of manufacture, mainly silk crepe industry. Adding to students exchange, we may do something more by exchanging culture with many companies from many fields. Yosano doesn't have a University but can we do som ething by relating with Universities?

I came here to find the keys.

Last night, I could see Professor John Grattan and Professor Gary Rawns ley from Aberystwyth University and talked a lot.

Everything's arranged by Mr. Arwel, thank you so much.

I still don't know what can I do, but we're sure we want to continue this exchange. I hope many students from Yosano and Aberystwyth will understand each other, will act for peace, and will keep in touch with people whom they met here and Yosano to make new movements.

Although I've got another public business and I'm leaving here tomorrow early morning, students, Taka and Haruka will stay until 15th. I want them to do great cultural exchange.

See you next year in Yosano!

(和訳)

本日は、歓迎会にお招きいただき、そしてこの様に大勢の皆さまに歓迎いただき大変嬉しく思います。 私は、4月に第2代与謝野町長に就任しました山添藤真でございます。今回、私は長い間続いている アベリスツイスと与謝野町の交流を今後も続けたいという意思を皆さまへお伝えするためここにやって来ました。

今年も私や与謝野町の高校生達を受け入れていただきありがとうございます。今回は11回目の学生の交換となります。私達は、アベリスツイスの皆様とこの交流が長く続けていることを嬉しく思います。友好協会会長のアウエル・ジョージさんをはじめ、これまでこの交流事業に携わっていただいた皆様に感謝します。

昨日、私たちはフランク・エバンスさんのお墓を訪れ、献花、黙とうを捧げ、将来を担う高校生達が、二度と戦争をしないことを誓いました。私達は、フランク・エバンスさんの平和のメッセージを理解し、過去に行ったことが繰り返されることがないことを確認しなければなりません。『咲いているときも、散った後も美しいさくら。二度と再び人間が、無残に命を失うことのないように、そして全ての人間が平和のうちに生を全うできますように。エイエン ノ ヘイワ』。私はここにいる高校生達はこのように行動することを確信しています。

さて、私は、与謝野町とアベリスツイスとの交流を発展することができないかと考えています。与謝野町は、織物を主産業としたものづくりの町です。高校生達の交流に加え、多くの分野の多くの企業と交流することにより、何か新しいことができないでしょうか。また、与謝野町には大学がないのですが、大学との関係で何か新しいことができないでしょうか。

私は、その手がかりを見つけるためにここに来ました。

昨夜は、アベリスツイス大学のジョン・グラッタン教授とガリー・ランスリー教授とお会いすることができ、 様々な話をすることができました。

これも全てアウエルさんに手配いただきました。本当にありがとうございます。

私は、まだ何ができるのか分かりませんが、私達はこの交流の継続を確認しています。そしてアベリスツイスと与謝野町の多くの高校生がお互いを理解し、平和のために行動し、そして彼らが新しい動きを起こすためここで出会った方々と引き続き連絡を取り合うことを願っています。

私は、他の公務があり、明日、早朝にアベリスツイスを離れますが、高校生達とタカ、ハルカは15日まで滞在しますので、みなさまと素晴らしい交流ができることを望んでいます。

来年は、また与謝野町でお会いしましょう。

⑥ソーラン節

アベリスツイスを訪れる高校生達は、歓迎レセプションで出し物することになっています。どの年でも何をしようか高校生達は迷うのですが、加悦谷高等学校で練習していることもあって「ソーラン節」の踊りを音楽付きで披露することを今年の高校生達はすぐに決めてしまいました。練習は、渡航前の事前



【ソーラン節を練習する高校生達】

研修会やそれ以外の日も集まってしていたようです。歓迎レセプションには全員が浴衣で出席しようという ことになりましたが、浴衣ではソーラン節の激しい踊りが出来ないため、男性は甚平に、女性は会の途中 で甚平に着替えることに。

こうして迎えた歓迎レセプション本番では練習どおりのソーラン節を元気に披露したところ、出席した多くの方々が立ち上がって高校生達に拍手を浴びせました。長年、この交流に携わっているアウエルさんも、こんな素晴らしいものを披露した高校生はいなかった、と大絶賛。多くの方に喜んでいただいたことから高校生達は、滞在期間中、プライマリースクールなどで披露し、同様に多くの人から拍手を浴びていました。

『ソーラン、ソーラン♪』という掛け声は、アベリスツイスの方々も覚えやすかったようです。

3. 事前研修会

本派遣事業が例年とは大きく違う内容となったことから、これまでの事業内容と現地事情を知っているという理由で、私が山添町長と高校生達に随行する職員に指名されました。これで随行は3回目となります。

さて、6名の高校生達は、アベリスツイスへ渡航するまでに 事前研修会に参加し、この事業が始まった経緯、目的、第二 次世界大戦中のフランク・エバンスさんの体験された内容を学 び、実際に大江山運動公園に建立された慰霊碑への参拝や 大江山ニッケル鉱山跡と日中悠久平和友好碑の見学を行い

ました。また、ウェールズやアベリスツイスがどのような所か自分達で調査し情報共有をしたり、ホストファミリーとの交流の心構えなども学びました。

このような事前研修は、「ただ単に物見遊山、観光、お友達づくり、英語の勉強に行くのではない」ということをきちんと理解しておくためのもので、教えるこちら側も真剣に話します。実際、最初はそのような目的で応募をしてきている者がほとんど



【上:事前研修会 下:慰霊碑参拝】

で、事前研修で本当の目的が分かった、と高校生達は後で必ず言います。

このような事前研修を終え、いよいよアベリスツイスへ出発することに。

4. 渡航期間中の活動

(1) 7月5日(土)

午前5時45分、与謝野町野田川庁舎。高校生達のご家族、友好協会会員、役場職員が集まるなか、山添町長のあいさつ、与謝野アベリスツイス友好協会の糸井定次会長から激励の言葉をいただき、午前6時に関西国際空港へ向け



【野田川庁舎前での出発式】

て出発。高校生達が待ちに待った12日間のアベリスツイス交流事業のメイン活動が始まりました。

関西国際空港11時30分、エールフランス航空AF291便は定刻どおり離陸し、パリへ。フライト時間は約12時間。乗り継ぎもスムーズにでき、エールフランス航空AF1564便は定刻どおり離陸し、バーミンガムへ。フライト時間は約50分。



【バーミンガム空港でアウエル夫妻の小型バスに】

バーミンガム空港へは、アウエル会長とリラさんご夫妻がチャーターした小型バスが迎えに来ていただいており、ここからアベリスツイスへはアウエルさん運転のこの小型バスで移動。驚いたことに現地時間午後8時ですがまだまだ辺りは明るく、「イギリスへ来たんだなあ」と最初に実感したものです。

途中、休憩をはさみ午後11時30分、アベリスツイス大学に到着し入寮。アベリスツイスへ3回目の訪問となった私

は、「帰ってきた」という感覚で一人余裕をかましていたかと言えばそうでもなく、町長と高校生達の明日からの予定の再チェックや準備、頭の中を整理したのち、長い一日が終了しました。

なお、大学構内は大学が整備した公衆無線 L A Nを利用することができますが、1 8 歳以下は利用不可能というルールで、私たちだけ I Dとパスワードを発行していただけるのですが、今日、明日は土日で事務所が閉まっているため 7 日の月曜日にならないと発行していただけなく、持参したスマートフォンによるLINEやFacebookの利用は月曜日からとなりました。

(2) 7月6日(日)

昨夜、遅かったにもかかわらず朝8時30分、アウエルさんが寮に。全員で大学構内の食堂へ徒歩で移動し朝食。アベリスツイス滞在期間中の朝食は毎朝、ここでいただくことになります。食事は、数種類の料理から欲しいものをいくつか選んで自分のプレートによそおって貰うスタイル。準備されている数種類の料理の内容は毎日同じであるため、結果、ほぼ毎日同じような内容の物をいただいてしまいました。量を加減しないと

食べきれないので、種類や量をよそおっていただく店員さんにきちんと伝えましょう。



【大学構内の食堂】

午前10時、大学から徒歩10分のペングライス校で、 緊張しながらホストファミリーと対面。6人のうち5人が昨年、 与謝野町を訪れた生徒達です。私と彼ら(彼女ら)はお互 い覚えていたので、「やあ」という感じで再会することができまし た。対面時間はそこそこに高校生達はホストファミリーに連れら れてこの場所を離れることに。山添町長、通訳の谷原さんと 私の3人は一日アウエルさんにお世話になることになりました。



【ホストファミリーと対面】

山添町長が今日、明日の2日間のみの滞在となるため、この2日間はいろんな予定を組んでいただいています。そこで折角ペングライス校に来ているので、平成18年(2006年)に前町長らがこの

学校に植樹した「椿」を確認することにしましたが、今日は学校が休みであるため、植樹場所を知っているのは、今ここにいる者の中では私だけ。ペングライス校の先生であるドナさんに「前回ここへ来た時に中庭で椿を見せてもらった。」と伝え、広々とした中庭へ案内されましたが、なんだか記憶している雰囲気と違うのです。こんなに広くなかったような・・・。「さあ、タカ、どれがその椿?」と言われても・・・・。植樹したのは「苗

木」であるため2年前の写真で見た大きさを考えると、椿の背丈は1.5 m程度か。校舎のコーナーに位置する場所であることは間違いなく、あちこち探すもののそれらしい木はないのです。校舎のコーナーに位置している木といえば一つしかなかったのですが、3 mほどある大きな木で「これではない。」と言うものの他には見当たらないので、とりあえず記念撮影をし、この場を後にしました。「これではないと思うんだが・・・。」

アウエルさん宅でリラさんを拾ってフランク・エバンスさんの眠るお墓参りにタリボント(Talybont)という町へ。いきなりのメインイベントです。時間を示し合わせていたのでホストファミリーも続々と集結。ここでマーク・ウィリアムス英国国会議員に面会することができました。

フランク・エバンスさんのお墓参りは、毎回必ずセットしていただくイベントで、高校生達はこの交流に感謝するともに、平和



【植樹した椿と思われる木の前で】



【右:アウエルさん 左:リラさん】

への誓いを行いました。このイベントにはホストファミリーも参加いただけるので、初めてこの交流事業に関わったホストファミリーの皆さんも、この事業の趣旨を理解することができとても意味があるイベントとなっています。









【フランク・エバンスさんのお墓参り】

この後、高校生達は午後10時までに大学寮へ帰って来るというルールでホストファミリーにお任せとなります。我々大人達は夕方、アベリスツイス大学の副学長らと面会の約束をしており、近くの自然保護区の海岸を散策ののち一旦、大学寮へ。

正式な面会の場であることから正装に着替え、アベリスツイス市街地プロムナードにあるレストランでディナーをいただきながらの面会となりました。出席者は副学長のジョン・グラッタン氏、国際大学戦略担当教授のガリー・ランスリー氏、国際事務員のウラ・ワング氏とアウエルさん、我々の計7名。与謝野町はちりめん産業が盛んであることをパンフレットやちりめん製品で紹介し、本町の若い世代の住民がもっと世界を知ることができるようにしたい旨の希望を伝えたところ、大学と連携して



【アベリスツイス大学副学長らと】

奨学金制度を創設できないか、交換留学制度ができないかといった大学側からの提案があり、今後、本町と詳細を検討して行くことを約束しました。

午後10時、帰寮。高校生達も帰ってきているのを確認。本当に長い一日でした。明日もイベントをたくさん組んでいただいており、夜は歓迎レセプションということで、これらの準備で帰寮後もゆっくりはできませんでした。

(3) 7月7日(月)

アベリスツイスから車で約1時間30分南下しウール博物館へ。与謝野町が織物のまちであり、この分野で新しい交流の手がかりを見つけたいという希望に対して、ここを案内していただきました。

ウェールズは畜産業とともに羊毛繊維の製造が昔から盛んでしたが、時代の変化により徐々に衰退してしまったようです。訪れたウール博物館では、羊毛から撚糸、織りを昔の旧式の機械で再現する展示がされており、実際に機織りのデモンストレーションを見ることができました。シャトルが織機の中を行ったり来たりしながらウール生地が織られていく風景は、我々が見慣れた丹後ちりめんと同じ。

出来上がった色とりどりの様々な生地やウェールズの伝統的な洋服などの展示、ショップの見学をさせていただきましたが、お話ではニュージーランドなどに押されてウェールズでは業界は縮小しており、携わる人、会社も少なくなっているとのことでした。丹後とよく似た課題がここにもあることが確認できたのです。











【ウール博物館にて】

午後からはアベリスツイスへ戻り、アベリスツイス大学の生物・環境研究所(Institute of Biological, Environmental and Rural Sciences)を見学。ここではススキに与える水や光などの条件を様々なパターンで試しその生育状況を分析する研究がされていました。また農業研究の棟ではウェールズのあちこちに生えている草からペレットや液体燃料を製造する仕組みを見せていただきました。どちらも高度で専門的な内容であったため高校生達には退屈な見学であったかなと思いましたが、熱心に聞いており興味がある生徒もいたことを嬉しく思いました。







【アベリスツイス大学生物・環境研究所】

さて、午後7時からの歓迎レセプションへ挑むことになりますが、それまでの空き時間で山添町長とケレディギオン州議会議員レイ・カント氏との面会をセットいただいていましたので、山添町長は通訳の谷原さんと面会場所のアウエルさん宅へ移動しましたが、高校生達の管理役として必ず大人が一人大学寮に残らなければならいないという規則により、私は大学寮に残り歓迎レセプションの準備をすることにしました。

後ほど確認した内容ですが、レイ・カント氏は州議会議員であるため、面会において地元友好協会への支援の打診、与謝野町側の公的支援の内容、議員や議会の仕組みの違い、町長の権限などについて情報交換ができました。

午後7時、パークロッジホテルで行政・学校関係者、友好協会会員やホストファミリーの皆さんが参加されるなかで歓迎レセプションが催され大歓迎を受けました。歓迎レセプションには、山添町長をはじめ6人の高校生達、通訳、私の9人全員が着物・浴衣に身を包み日本の与謝野町をアピール。全員がこのような姿で出席したのはこの交流史上初めてです。

浴衣姿の日本人に早速人だかりができ、行政関係者や友好協会関係者らへの挨拶が続きました。私は過去に知り合った方々と再会し、慣れない英語で何とか会話を続けます。外庭へ移動し地元新聞記者により集合写真が撮られ、その後それぞれに記念撮影や談笑が続き、室内に戻る気配なしの賑やかな状態。アウエルさんに促されやっとのことで室内へ移動し、まずは夕食がスタート。思い思いに食事、会話を楽しんだあと、いよいよスピーチが始まりました。





【歓迎レセプションにて】

まずは地元友好協会会長のアウエルさんから、この交流がフランク・エバンスさんにより始まり、今日まで続けられてきたこと、エバンスさんが目指したのは高校生達が両町の架け橋となって平和な世界を作るこ

と、そして山添町長が新たな交流の形を探しに今回ここにやって来たことが紹介されました。このあとケレディギオン州議会議長エレン・グワン氏、アベリスツイス町長ブレンダ・ヘインズ氏らの挨拶が続き、いよいよ与謝野町からのお客様の紹介がアナウンスされ山添町長をはじめ高校生達の登場です。

山添町長は着物、紋付羽織、白足袋、草履の正装でスピーチ(内容は前述)。そして高校生達は一人ずつ英語で自己紹介。加えて通訳の谷原さんも自己紹介をされ、恥ずかしながら私もショートスピーチをさせていただきました。

最後に日本で猛特訓してきた「ソーラン節」披露。前述したとおり拍手喝采。

この後、会話や記念写真で盛り上がり、盛会のうちに歓迎 レセプションがお開きとなりました。

今日も長い長い一日でした。山添町長は明日の早朝 5 時にアベリスツイスを離れ帰国の途につかれます。



【ソーラン節披露!】

(4) 7月8日(火)

早朝、山添町長の見送りから一日がスタート。与謝野町を出発してから前日まで大小様々なイベントの連続でしたが、今日は一日アベリスツイスの学校関係を回り、生徒のみなさんとの交流です。

最初は、3歳から11歳までが通う保育所と小学校の機能を併せ持つ「Plascrug Community」と「Ysgol Gymraeg」という2つのPrimary Schoolを訪問。後者の学校はウェールズ語系のスクールです。

我々は分かれて構内の案内をしていただいたのですが、私が見学した教室は、比較的年齢の小さい子供の教室で講義形式ではなく、テーブルを囲んだりグループで学習する寺子屋方式を採用されており、室内はカラフル、壁などの視覚に入る場所のあちらこちらに絵や写真、単語、地図などが貼られており、常時、学習意欲を持たせる工夫がされていました。ある教室では先生が電子黒板を使って、また別の教室では児童がタブレットを使って調べものをしながらレポートをまとめる姿も見られました。明らかに日本の教室の風景、雰囲気が違います。

休憩時間には、10歳くらいの子ども達がダンスを披露してくれ、高校生達はお返しに昨夜披露した「ソーラン節」をすると言うので、私のiphoneにスピーカーを接続して音楽を流し披露。すると終わった瞬間、子ども達から大歓声!ここでもお互いの文化の違いに触れることができました。



【2つのPrimary Schoolにて】

午後はアウエルさんが6年前まで校長をしていたペンウェディグ校へ。12歳から18歳までが通うSecondary Schoolで、ウェールズ語系の学校です。また、ホストスチューデントが通う学校の一つです。訪問した時間が昼休みであり休憩ルームにホストスチューデントや多くの生徒がいたこともあり、またまた「ソーラン節」の披露。そして生徒達から拍手喝采!言葉の交流だけでなく、このような文化の紹介もお互いの理解深める有効な手段であることを再認識することができました。



【ペンウェディグ校にて】

学校での授業は、先生が自分自身の教室を持ち、生徒自身が専攻した科目の先生の教室で学ぶスタイル。制服は学校のネクタイのみ指定され、シャツが白か黒、パンツが黒であれば自由なスタイルとなっています。授業は16時頃に終了し、遠方から通学する生徒は方面別のスクールバスで帰宅するようです。



【ペンウェディグ校で音楽会】

この日は、私たちが訪問するということで特別に音楽会を開催いただきました。トローンボーン、クラリネット、フルートの独奏と女子生徒の独唱、9人の金管楽器による重奏が演奏されました。確か、前回アベリスツイスを訪問した際、その子の得意分野を更に伸ばすための集中的な指導があって楽器演奏もその一つであると聞いた記憶があり、この生徒たちはきっとこの指導を受けたのであろう。中高生とは思えない演奏技術、歌声でした。

6人の高校生達は昨夜の歓迎レセプションを体験したことで、一気に交流の輪が広がった感じになり、 また英語という言葉の壁にも慣れてきたことで、どの学校でも積極的に交流ができ笑顔の絶えない一日と なりました。

高校生達はここで一旦解散となりますが、夜10時までに帰寮することを伝えホストスチューデントとステイ先へ帰宅。私と谷原さんは帰寮後、ペングライス校のドナ先生宅に招待され夕食を共にさせていただきました。今日から毎晩、どなたかに夕食をご馳走になることになります。

(5) 7月9日(水)

アウエルさんが運転する車でアベリスツイスから北東へ車で約40分の場所に位置する町、Machynlleth(ウェールズ語で発音ができない)へ行き、水曜日だけ開かれる市場を見学。今日はホストスチューデントのアレックスも同行です。Machynllethでこの交流でいつもお世話になっているキャロライン夫妻と合流しました。キャロラインさんはペングライス校の先生で、加悦へ



【キャロラインさんと合流】

も2回訪問されており、その内1回は夫のジェイクさんと一緒に訪問された経歴の持ち主です。

彼女いわく「市場を見ればその国の食生活が分かる」ということで、毎回、この市場見学は予定に組み込まれています。市場は、大通りの両側にフリーマーケットのように食材、雑貨を売る店が多数並びます。ここへ地元のおじいちゃん、おばあちゃんをはじめ近隣からも大勢のお客さんが集まり、思い思いに買い物をしたりカフェでお喋りを楽しまれます。今日もとても良い天気で大勢の人が晴天のもと笑顔で買い物などを楽しまれているのが印象的でした。







【Machynllethの街並み】

【オープンカフェ】

【水曜マーケット】

続いてスノードニア国立公園内のカダーイドリス(Cadair Idris)山へ。ここは登山やハイキングで有名な山で、今日はみんなでここを登るということでした。登山道は整備されていたため登りやすかったのですが、やはりそれなりの脚力が要るのと、湿度が低いウェールズとは言え昼間の晴天の下では動くと汗が噴き出てきます。

しかし圧倒的な美しさを持つウェールズの大自然の中では、足はどんどん上へ上へ進みます。途中振り返ると遠方にはなだらか丘陵、眼下には草原。今にもエルフやホビット等のファンタジーの生き物が出て来そうです。時間の都合で頂上まで進むことは出来ませんでしたが、大満足の登山となりました。下山後に食べたアイスクリームの美味しいこと。







【カダーイドリス山を登山】

アベリスツイスへ戻って昨日と同様に一旦解散し、高校生達はホストスチューデントと行動を共にし、私達は帰寮後、アベリスツイスの議会議員でもありケレディギオンの州議会議員でもある友好協会員のケレディクさん宅に招待され夕食をご馳走になりました。ウェールズは与謝野町とは違う地方政府制度であることを以前から聞いていました。この夜、議員であるケレディクさんに統治システムについて少しお話を伺うことができましたので報告します。

アベリスツイスは、5 エリアから 1 9 人の議員が選ばれ、ケレディクさんは中心部の一番小さいエリアから 選出された議員。4 年任期で前回は 2 0 1 2 年に選挙が行われました。町長は議会が任命するシステムになっているが町長に権限はほとんどなく、地方の行政運営はケレディギオン州が行うとのこと。歓迎レセプションに来られていたブレンダ・ヘインズ氏がアベリスツイスの町長です。アベリスツイスが属するケレディギオン州は、4 0 エリアから 4 2 人の議員が選ばれ、ケレディギオン州が予算、権限を持って自治を行っているとのこと。歓迎レセプションに来られていたエレン・グワン氏がケレディギオン州議会の議長です。なお、

日本では議会において執行機関が提出する議案を審議することがメインですが、ケレディギオン州は与党 議員を中心に議員が執行機関の各部局の長に就任し執行機関を動かす議員内閣制のようなシステム とのことです。ケレディクさんは現在与党議員ではないとおっしゃっておられました。時間に限りがありさらに詳 細をお聞きすることはできませんでしたが、日本のシステムとはこのように大きく違うことを確認することができ ました。

(6) 7月10日(木)



今日はホストスチューデントのアレックス、ハンナ、ベサンが同行 し、昨日と同様アウエルさんの運転する車でお出掛けとなりまし た。行先はアベリスツイスから北へ車で約1時間の場所に位置す るTywynという町。ここはタリスリン(Talyllyn)鉄道の起終点 駅のある町です。タリスリン鉄道は、イギリスで最初の保存鉄道で

あり機関車トーマスの原作者も保存に関わったとのこと。車両は少 し小さめの実際に石炭で動く蒸気機関車でボランティア団体で運 営されているとのことです。Tywynで今日もキャロライン夫妻と一 緒です。さらにキャロラインさんの娘さんとお孫さんも同行していただ きました。

私達はここから東へ約10km先にあるナントグウェルナル(Nan t Gwernol) 駅まで蒸気機関車の旅です。ガタン、ゴトンと心地 良いリズム、時折り響く汽笛の音。列車は牧草地の丘陵をゆっくり と走って行きます。時間がゆっくりと流れていると錯覚するほどリラック スして移動を楽しみました。「ああ、このままずっと乗っていたい」と思 っていても、楽しいことはすぐに時間が過ぎてしまいます。





【タリスリン鉄道に乗車】

続いてCastell v Bereという古城跡へ向かいました。昔、ウェールズはイングランドに征服された国。ウ ェールズにはあちこちに古城があるそうです。Castell y Bereは丘の上にあるため、城というより砦です。 昨日の登山ほどではない緩やかな道のりを進み到着です。ここでジェイクさんよるウェールズ軍とイングランド 軍の武器の違い講座が始まりました。ウェールズ軍の武器は高さ2 mほどの弓で、矢は遠くまで飛ばせま すが連射は難しい。イングランド軍はボーガンで、矢は遠くまで飛ばせませんが連射ができます。ジェイクさん は、この説明をするためにわざわざ武器を持参してくれました。さらに日本の弓も持参されており、「日本で

はこの弓を馬上から射るのです」と説明。ジェイクさんは、キャロラインさんと加悦を訪 問してからすっかり日本に惚れ込み、日本に関係する様々な本や物を持っておられ、 アベリスツイス大学の日本語短期講座を受講したこともあるそうです。









[Castle y Bere]

時間がもう少しあるようなので、ふもとのセイント・ミシェルという古い教会へ。この教会にはこのあたりで布教に努めたマリー・ジョーンズ(Mary Jones)の物語を展示されていました。

いつもと同様、アベリスツイスへ戻って一旦解散し高校生達はホストスチューデントと。今夜はアウエルさん宅で夕食をご馳走になり一日が終了です。



【セイント・ミシェル教会】

(7) 7月11日(金)



早いものでもう金曜日。先日お世話になったケレディクさんの 案内で国立ウェールズ資料館(The Natinal Library of Walse)へ。近くなので徒歩で移動です。今日もアレックスが 同行。君はいつ学校へ行っているの?

Libraryをあえて資料館と記述しています。ここには図書はもちろん絵画や美術品などウェールズに関するあらゆる資料を保管・展示する施設で、寄贈などにより毎年資料が増えており、これらを保管しておくため現在も建物がどんどん広くなっています。私たちは特別に普段入れない収蔵室まで案内していただき、貴重な絵画などを保管しておく可動式ロッカーやスプリンクラー完備の部屋を見ることができました。なお館内は撮影禁止でお伝えすることができません。

(国立ウェールズ資料館) 続いて市街地へ徒歩で降りてケレディギオン博物館へ。と、 その前に加悦町から寄贈(植物の輸入は制限されているため実際は現地で調達)され、フランク・エバンスさんらが植樹された桜の木を確認するため旧役場庁舎(Town Hall)前へ行きました。なお、現在の役場機能はアベリスツイス駅の南側に新築されたケレディギオン州庁舎ビルの中にあるそうです。 高校生達はこの日まで何度も市街地を散策しているため、この桜の木は既に確認しており全員で記念撮影。



【旧タウンホール前の桜】

ケレディギオン博物館は、旧役場庁舎からすぐそこです。ここではケレディギオンの歴史を紹介するためにこの地での昔の生活スタイル、家具や調度品、衣類、織機まで展示されていましたが、時間がなく少々駆け足で見学することになりました。しかし、高校生達はお構いなしにじっくり見学をし、終わってみれば昼食タイムを大きくオーバー。でも関心を持って見学してくれたのでよしとしましょう。とういうことで昼食は博物館の目の前の店でとることになるのでした。









【ケレディギオン博物館】

さて、案内いただいたケレディクさんは前述のとおり議員ですが、アベリスツイス市街地で「モナリザ」という土産物店の経営者でもあります。すぐ近くなので全員でショップを訪問し、たくさんのお土産を購入し店をあとにしました。

今日はここで解散。高校生達はホストスチューデントと合流。私たちはこのあとキャロラインさんのお世話になることに。キャロラインさんの自宅はアベリスツイスの隣のボース(Both)と



【ケレディクさん経営の土産物店にて】

いう所で、アベリスツイスと同様に海岸が美しい町です。時間に余裕があったため海岸の散策にも連れて 行っていただき、自宅ではジェイクさんと共に夕食をご馳走になったあとは、ジェイクさんの日本大好きトーク を聞いて帰寮しました。

(8) 7月12日(土)、7月13日(日)

週末、高校生達は終日それぞれのホストファミリーと行動を共にするフリーデイ。

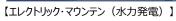
私達はドナさん夫妻に連れられて北ウェールズへ。車で2時間ほど走ったでしょうか。Llangollenという 町で開催されているEisteddfodという大規模な音楽祭やPontcysyllte水道橋と運河を見学させてい ただくなど夜まで終日、お付き合いいただきました。



【上段:Eisteddfod 下段:Pontcysyllte水道橋と運河】

翌日はアウエルさんと更に北ウェールズへ。山の上の湖から山中の管に一気に水を落とし、その力でタービンを回すことで発電する、いわゆる水力発電施設と、天空の城ラピュタに出てくる城のモデルとされたカールナルフォン(Caernarfon)城の見学させていただき、帰りはウェールズの西側に位置するカーディガン湾沿いの美しい景色を眺めながらアベリスツイスへ。長時間のドライブとこれまでの疲れが一気に出てきて、車の中では睡魔・睡魔の状態となってしましました。この日は早めの帰寮。









【カールナルフォン城】







【北ウェールズやカーディガン湾執念の大自然】

(9) 7月14日(月)

アベリスツイス最終日。この間ずっと滞在していたアベリスツイス大学のキャンパス内を案内いただきました。案内役は同大学の国際事務員ウラさん。彼女は2日目に町長と副学長らと会談した際に同行されていた方です。

まず最初は、宿泊していた寮から映画、テレビ番組制作を学ぶ施設へ移動。

何だかいつもと雰囲気が違う。そう、今日は大学の卒業 式であり、卒業生は海外ドラマなどでよく見る例のガウンと角 帽の衣装に身を包んでおり、その周りには家族と思われる方 がたくさんおられます。キャンパス内ではこの卒業生と家族を あちこちで見ることになりました。



【アベリスツイス大学卒業式へ出席する学生】

さて、映画、テレビ番組制作を学ぶ施設では、いくつかのスタジオや編集機材を見せていただき、最後に英国放送会社BBCのウェールズ局を見学。ここではRadio放送をされているとのことです。

続いてComputer Science学部の学舎へ。教授の案内によりコンピュータルームやロボット制御研究、さらに実際に火星探査を行うロボット開発の研究施設も見せていただくことができました。理工系を目指している高校生は、この学部に興味を示していました。











【アベリスツイス大学 キャンパス内の見学】







最後に国際政治(Internatinal Politics)学部へ。こ こには横浜出身の橋本力さんがおられ、自身がここに来た経 過、日本人が海外の大学で学ぶことの経験、英語を学ぶ意 味などについて詳しく説明いただきました。なお、この国際政 治学部では戦争、戦略、軍事という分野を教えており、橋本 さんは諜報活動、いわゆるスパイを専門にされているとのことで す。あまり聞きなれないこの学問ですが、高校生達は橋本さ



【アベリスツイス大学国際政治学部の説明】

んの日本語での説明に食い入るように聞き入り、この学部に入学したいと言い始める高校生も。

その後、昼食を取り、ホールや劇場のあるアートセンターを見学し、いよいよこの訪問の最後の目的地 ペングライス校へ。初日にホストファミリーと対面した場所です。

ペングライス校は、12歳から18歳が通うセカンダリースクールで、ウェールズ語系のペンウェディグ校と 違い英語系の学校。今回のホストスチューデント 1 名が在学しています。ペングライス校では校長自らお

出迎えが予定されているようでしたが、もう一つ重要な用事が あります。6日ホストファミリーと対面したあと、山添町長らと確 認した木は、平成18年(2006年)に前町長らが植 樹した椿ではないことが分かり、もう一度確認する必要があり ました。何故分かったかというと、私がスマートフォンで与謝野 町ホームページ内に掲載しているアベリスツイス交流のページ で、2年前のペングライス校訪問写真を見て明らかに違う場



【2006年に前町長らで植樹された椿】

所、木であることが確認できたからです。今日は、事前にこの写真をドナさんに見ていただいていたためスム ーズに椿の場所に案内いただきました。確かに中庭で校舎のコーナーに椿があります。あくまでも2年前の 写真と実物との比較ですが、椿の背丈は2年前から少し高くなっている程度でした。

校長にお出迎えいただいた訳ですが、とてもよく喋る方で、しかも高校生達に対してフレンドリーな雰囲 気で接して頂きました。高校生一人一人に声をかけていただき、ペングライス校指定のネクタイまでプレゼ ントいただきました。







【ペングライス校にて校長の歓迎を受ける】

いよいよ明日の早朝、アベリスツイスを離れます。ペングライス校を解散した午後2時30分から帰寮 する午後10時まで高校生達はホストファミリーとどのように過ごしたのでしょうか。

私達は夕方、アウエルさんと、キャロライン夫妻とで海岸沿いのレストランで最後の夕食いただき、今回 のアベリスツイス滞在を締めくくりました。

(10) 7月15日(火)





【アベリスツイス駅でお別れ】

午前4時起床。昨夜のうちにスーツケースへのパッキングを済ませておいたので、着替えて出るのみ。

アベリスツイス駅の列車出発時刻は午前5時14分。アウエルさんの車で大学から駅を2往復し高校生達とスーツケースを駅へ運んでいただきます。アベリスツイス駅にはホストファミリーが待ち構えており、最後のお別れです。

終わってみれば長いようで短かったアベリスツイスの滞在。ホストファミリー宅での宿泊はなかったものの、高校生達はホストファミリーとの交流を存分に楽しんだ様子がうかがえ、列車が出発するまで別れを惜しむ姿があちこちで見られます。涙を流している者もいます。無情にも時間はあっという間に過ぎ、列車に乗車するとドアが閉まり、帰国の途に。高校生達は列車内からホームに向かって手を振りながらアベリスツイスをあとにしました。

列車は定刻どおりバーミンガム空港に到着。11時20分、オランダ航空 K L 1424便は定刻どおり離陸しアムステルダムへ。フライト時間は約50分。乗り継ぎもスムーズにオランダ航空 K L 867便は定刻どおり離陸し、関西国際空港へ。フライト時間は約10時間。

(11) 7月16日(水)

日付が変わって午前8時45分に関西国際空港に着陸。すぐにスマートフォンの電源を入れ、与謝野町役場から関西国際空港に迎えに来ていただいている職員へ到着の連絡を入れました。飛行機を降りるとまず思ったのは「暑い!」。日本は猛烈な真夏日でウェールズのあの涼しさとのギャップに愕然としたものです。



【野田川庁舎に到着】

私達一行は町が手配した貸切バスで一路、与謝野町へ向かい、ほぼ予定どおりの午後1時過ぎに野田川庁舎へ到着し、先に帰国されていた山添町長や高校生達のご家族、友好協会会員、役場職員のみなさんの出迎えを受けました。

無事に帰国できたことが何よりの報告。最低限の仕事を完遂することができました。

5. 帰国後

8月8日(金)与謝野アベリスツイス友好協会の糸井定次会長をはじめ会員のみなさま、在学高校の先生、高校生達のご家族のみなさまが参加いただく中で研修報告会を開催することができました。



【研修報告会にて町長報告】



【報告会で報告する高校生】

報告会で高校生達は一人ずつ自分の言葉で研修の報告をしていただきました。今年の高校生達はプレゼンテーションソフトやワードでまとめた文章を前方のスクリーンに映写しながら報告する者が複数おり、報告を聞いている方にとっては視覚的にも理解することできて大変良い報告となりました。このような方法で報告した生徒は初めてです。

事前研修により学習していたため、全ての高校生達がしっかりとした目的意識を持ち、その成果を報告し、またフランク・エバンスさんの平和への思いに対する報告もしたことは、大変喜ばしいことでした。報告会では第2部として訪問団による公開座談会を予定していましたが、それぞれが十分報告してくれたため座談会で高校生から引き出したい報告もほぼ無い状態となり、内心どのように進行しようか悩みながら聞いていました。結果、残り時間も少なくなり座談会を止め、参加いただいた皆様からの感想、質問をいただいたり、高校生達も言い足りなかったことを報告するなどにより理解を深めることができました。

「町長さんはアベリスツイス大学への留学制度を考えると言っておられましたが、いつ実現してもらえるんですか~」という高校生の質問には、山添町長もたじたじ。「前向きに進めます」と言う答弁でした。







【アベリスツイス訪問団】

6. 終わりに

繰り返しになりますが、私は今回で3回目のアベリスツイス訪問となりました。また、この交流事業の担当者として11年目に入っています。市町村職員でこのように長期間同じ職務を担うことは珍しいのではないでしょうか。英語を流暢に喋ることができる訳でもありません。特別に海外の何かを知識として身に付けている訳ではありません。しかし、長期間携わることでこの間の交流の変遷を見ることができました。

平成4年からの高校生の相互派遣は、受け入れ内容などを年々進化させながら今日まで続けることができました。この交流に関わられた双方の高校生、ホストファミリー、友好協会のみなさんは、フランク・エバンスさんの平和への思いに共感し、未来へ引き継いでいただいているものと思います。この10年間だけでも本当に大勢の方にお出会いすることができ、私自身もおおいに勉強をさせていただくことができ本当にありがたいことです。これまで全く興味のなかった国際交流が逆に楽しくなっています。英語を駆使することができればさらに理解が深まり、楽しくなること間違いなしと思いながら、なかなか実施できていないことが反省点でしょうか。

さて、これまでの高校生の交流に加え、新たな交流の形を探すことが今回の一番の目的でした。アベリスツイス大学との接触は本当に大きな成果になったものと思います。これをきっかけに与謝野町の方が同

大学へ、逆に同大学の教授や学生のみなさんが与謝野町へ来られる交流を目指したいものです。これに つきましては詳細を協議して行くこととなっていますので、引き続き担当として実現に努める所存です。

ものづくり、織物のまちをキーワードとした新たな交流の形探しについては、羊毛産業の状況の一部を知り得ることができたこと、また行政関係については新たに国会議員、州議会議員と知り合えたことが成果となり、今後、これらの状況、方々とどのようにつながって、何ができるのか、引き続き模索することになります。

ホームステイについては、ホームステイによる交流がその国の生活、文化を理解しあえる素晴らしい方法であることは、アウエルさんらも十分理解されており、当時議会へも反対運動をされたのですが、決まってしまったことは受け入れなければなりません。昨年からお互いホームステイをしないルールとなり、今回で双方がこのルールを1回ずつ体験したことになります。現地の宿泊費用負担の増加が最大の影響である以外は、これまでどおり高校生達の交流が可能であることが確認できました。お金のことが引き続きの課題ではありますが、これまで関係者のご努力で続けて来れたこの交流を決して途絶えさせてはならないと思います。

We should take over Mr. Frank Evans's Vision to the future. (私達はフランク・エバンスさんのビジョンを未来へ引き継ぐ必要があります。)

これで今年の高校生派遣事業は終了しましたが、私自身は引き続きこの交流に携わり、少しでも平和な世界の実現、継続に努めたいと考えています。

つたない報告書で読み苦しいところがあったかと思いますが、この報告書で一人でも多くの方に共感いただければ幸いです。

ER CÔF

IN MEMORY OF MY COMPADES

EX PON FEMANS

EX PON FEMANS

ABERYSTNYTH NOV 1884

【フランク・エバンス氏ら建立の慰霊碑】

※私が研修報告会で使用したプレゼン資料を添付しましたので、本報告書と合わせてご覧ください。